

されてきている諸様相との関連、及び院政期への展開過程を解明すべく、撰関期について更なる精緻な分析をしなければならぬ。また有職故実を単なる儀式作法の知識として終わらせるのではなく、歴史研究の考察対象として位置付けなければならない。本報告はその前提としての第一過程である。

大谷大学図書館禿庵文庫所蔵の中国古封泥

米田 健志

大谷大学元学長・故大谷登誠氏の蔵書が、禿庵文庫として大谷大学図書館に所蔵されていることは周知のとおりである。禿庵文庫には、典籍以外にも中国古器物のコレクションが所蔵されており、そのうち古印および古硯に関しては、それぞれ『中国古印図録』『中国古硯図録』が刊行され、その詳細が公開されている。しかしながら、今ひとつのコレクションである封泥については、これまで詳細な調査がなされていない。筆者はこのたび、この封泥を実地に調査する機会を得たので、その概要をここに報告したい。

封泥とは、秦漢時代において文書・容器などの封印に用いられた粘土塊のことであり、そこに残された印文は官職名・地名を考証する際の、またその形態は、紙ではなく簡牘を用いるという点で特殊な、当時の文書行政の実態を窺ううえでの重要な史料となる。禿庵文庫に所蔵される封泥・合計二五二点は、日本では東京国立博物館の蔵品に次ぐものであり、また中国を含めても有数のコレクションである。

封泥の発見は、清・道光二年（一八二二）の四川における出土に遡る。当初はその用途が知られず、「印範」すなわち印章鑄造に用いる鑄型と考えられたが、のち劉喜海が『長安獲古編』において、『続漢書』百官志三に、「守宮令一人、六百石。本注曰、主御紙筆墨、及尚書財用諸物及封泥」とあることから、これを封泥と特定した。やがて同治年間（一八六一―一七四）には陝西からも多数出土し、その多くが呉式芬・陳介祺の所蔵に帰し、のち光緒（一八七五―一九〇八）初めの山東からの出土品の一部も、呉・陳両氏の得るところとなり、これらが『封泥攷略』十巻に著録される。山東出土品はこの他に劉鶚・郭甲堂・羅振玉らが入手した。しかし、こうして続々と発見された封泥も、より具体的な使用法とはいえず、必ずしも充分明らかにはななかった。なぜなら、封泥は先述したように簡牘と表裏一体で用いられるものであり、そのころには簡牘の実物が世に知られていなかったからである。当初の封泥に対する興味は、専ら古文字学および地名・官名の考証に関するものであり、文書行政との関連に着目されることはほとんど無かったといつてよい。

簡牘の発見は、二〇世紀初頭のスタインによる敦煌での発掘に始まり、これに対する最初の研究成果が羅振玉・王国維『流沙墜簡』である。また王国維「簡牘檢畧考」は、封泥に対する文書学的研究の嚆矢であり、文献史料の博搜にもつき簡牘と封泥との関係を論じる。さらに、のちには王献唐が山東省出土の封泥にもとづき『臨淄封泥文字叙目』を発表している。日本では、東京国立博物館蔵品（これはもと陳介祺蔵品であった）の形態分類を行った江村治樹「陳介祺旧蔵の封泥の形式と使用法」がある。

以下、禿庵文庫所蔵の封泥の特徴を、主として東博蔵品との比較のうえで見てみよう。

残された印文にみえる官職名は、大多数が山東地方の地方官職であり、封泥の出土地は山東地方と考えてよい。これに対して東博蔵品は、四川・長安を中心として山東のものを若干含む。禿庵文庫封泥に見える官職名の主なものは、次のとおりである。

①齊王国

齊宮司丞・齊御府印・齊食官丞・齊大倉印・齊鉄官印・齊鉄官丞・齊内官丞・齊郎中丞。

②齊郡所属の県・侯国

臨菑丞印・臨菑左尉・臨菑右尉・臨菑市丞（以上、臨菑県）・臨胸丞印（臨胸県）・西安丞印（西安県）・広侯邑丞（広侯邑）。

③泰山郡所属の県

来無丞印（来無県）。

④濟南郡所属の県

於陵丞印（於陵県）・東平陵丞（東平陵県）。

⑤千乘郡所属の県

千乘丞印（千乘県）・博昌丞印（博昌県）・狄丞（狄県）。

⑥琅邪郡所属の県

姑幕丞印（姑幕県）など。

⑦魯国所属の県

騶丞之印・騶之左尉・騶之右尉（以上、騶県）。

⑧蕃川国所属の県

東安平丞（東安平県）。

また、印文に残る官職の地位は、郡府所属の官はほとんど見えず

（わずかに□山□守章・烏平太守・城陽相印章のみ）、ほとんどが県所属の官であり、かつ県の長官たる県令・県長は少なく、佐官たる丞・尉が多い。対して東博蔵品は、漢帝国の中央官職を多く含む、また郡太守や県令の封泥も多数ある。

封泥の形態について、江村治樹は東博蔵品を、①箱式検に用いられたもの（検とは封泥を固定するための特殊な形態の簡牘である。東博蔵品のうち約一三〇点）、②凹式検（約二八〇点）、③平検（約九〇点）、などに分類する。禿庵文庫蔵品では、大多数が③平検に用いられたものであり、①箱式検は、□陽丞印・信□家□・城陽相印章・□山□守章・□侯國丞、②凹式検は、臨菑丞印・□安國・□陵丞印・長陵丞印・□□丞印・□陵令印、とそれぞれ数点ずつが存するのみである。裏面には、藁しべのような植物繊維を押しつぶした、平紐の痕跡が残るものが多く、また同時に側面には細紐を貫通させた孔が残されている。これは、簡牘を束ねたのち平紐で巻き、そこに予め細紐を通した粘土を貼りつけ、押し印したものと推測される。また、粘土を丸めた際に付けられたと思しき指紋が残されているものも多数ある。

大谷登誠氏が如何なる経緯で、これらの封泥を入手されたかについては、大谷大学図書館所蔵「大谷登誠師宛て書簡」中に、大谷登誠氏が事務用箋に自筆された「封泥評価額表（仮題）」があり、その一端を窺わせる。そこには次のようにある。

平倉旧蔵封泥雙化度竈讓藏

……（中略）……

合計百六十二個

雙化度竈藏

一箱 百個

雙化度龕取藏封泥総計貳百六十二個

右評価額一方十五円合計三千九百卅円也、昭和六年十二月廿三日定

ここに見える「平龕」とは大谷氏と親交のあった篆刻家園田湖城の号であり、「雙化度龕」とは、「化度寺故僧暹禪師舍利塔銘」拓本を所蔵されていたことによる大谷氏の号であろう。したがって、禿庵文庫蔵品のうち百点は、園田湖城から譲り受けたものであることが明らかとなるが、それ以外の分については、現段階ではその伝来経路は不明である。

〔附記〕本稿執筆にあたって、大谷大学図書館には、同図書館所蔵の封泥および「大谷瑩誠師宛て書簡」の閲覧をお許しいただいた。ここに記して、関係各位に謝意を表したい。

古和讃の構成と表現に関する一考察

広小路直人

平安時代に成立した和讃を古和讃という。内容は仏法僧を讃えるものである。表現上の特徴は流麗で優雅であるとされる。後世においてもこれらの和讃は歌いつがれ、またその流れを汲む和讃も制作される。こういった古和讃や、その流れにあるといわれる和讃の特徴について、仏讃・法讃・僧讃の代表的なものの一部を取り上げ、構成や表現などから考察を試みたい。

最初期の和讃と考えられているものに、千観（九一八―九八三）作「極楽国弥陀和讃」がある。現在伝わっているものは六十八句である。構成及び内容は以下の通りである。冒頭から一八句目ま

で、阿弥陀仏の浄土の様子を阿弥陀経によって具体的に描く。そして四十八の誓願をいい、南無阿弥陀仏と唱えることの功德を説く。その後「25 浄土十方オホケレド 26 極楽ワレラ縁フカシ 27 仏三世ニ在セド 28 弥陀ハ我等ニ契アリ」（行頭の数字は何句目かを示す。以下同じ）と、我々と極楽や阿弥陀仏は近しいものというところが強調される。続いて、浄土に生まれた後のこと（「37 我等ガ此身シマム」「40 此身ハ聖ヲ友トシテ」など）を記す。あわせて人身は受け難く仏には遇いたい事が書かれる。そして、阿弥陀仏を頼まねば「48 我身三途ニ落チヌベシ」「56 我等ハ浮ム時ナケン」とする。以上のような展開となっており、より浄土の様子を実感的に感じさせ、この和讃を聴き、歌うものが実体験するかのような構成になっている。また全体を通して、言葉の選択などの表現面においては、当時仏教の専門知識のない人々にとってもわかりやすいものであったと想像される。

同じような内容の和讃に『弥陀如来和讃』がある。覚超（九六〇―一〇三四）作と伝えられるが疑わしく、成立年代は下ると推定される。ここでは「13 情々思ひつらぬるに 14 我等も仏生具足して 15 仏に替らぬ身成ども」「26 哀せつなき我等かな 27 人々我身を思へかし 28 我身を思ぬ果なさよ 29 此世限りの我身かよ 30 此世が有ば未来あり 31 仏に成るも我身なり 32 地獄に陥も我身ぞや 33 心ひとつの仕業にて 34 苦にも楽にも逢身ぞや」などというように、極楽浄土や阿弥陀仏がより身近に感じられるような表現がみられる。つまり極楽も仏も我々と連続した存在、人間の側からの発想が見て取れる。言葉の易しさと同時に、このような発想・展開が人々にとって受け入れられやすかったのではないかと考えられる。